

Afternoon Music

William Gillock
2023.3.1 No.91

<https://www.gillock.jp/>

<http://www.facebook.com/GillockAssociationOfJapan>

日本ギロック協会会報[アフタヌーン・ミュージック]第91号

©William Gillock Association of Japan



仲間と会える喜び～各支部からの活動レポート



↑ 柏支部の皆さん

柏ギロッククリスマスコンサート 【柏支部】

昨年12月7日、一昨年に続き、柏日本閣でクリスマスコンサートを開催しました。シャンデリア輝く広間で、美味しいお料理と心のこもった演奏に、1年の締めくくりとして幸せな時間を共有できました。

続くコロナ禍で、昨年もメンバーそれぞれ大変なこともありましたが、嬉しいことは共有し、困った時は助け合い、「互助会ギロック」で乗り切る事ができました。今年も対面、オンライン、動画視聴の3本立てで、全員参加できる定例会活動をしていく予定です。

(記/永澤昌江)

ギロックから学びを広げていく 【西宮支部】

西宮定例会では、ギロックの作品に限らず、学びを広げていく定例会を目



↑ 西宮支部の皆さん

指しています。ギロック「ノクターン」「ポリネシアン・ノクターン」を学ぶときは、ショパンをはじめ、フィールド、フォーレ、ドビュッシー、グリーグ、ボロディン、ビゼーなど、他の作曲家のノクターンも探求し、夢中になりすぎて、ギロックのノクターンはまだ誰も弾いていなかったことに気づくという有様です。

現在はウィーン関連のギロック作品にちなみ、ウィーン音楽についてそれぞれの資料を持ち寄り、語り合っています。コロナ禍でなければ、誰かがウィーン旅行のチケット、メンバー人数分を、ネットでポチッとしような勢いです(笑) (記/前田陽子)

「チャット de ギロック」を 定例会で活用中！ 【広島支部】

広島支部では、メンバーのスケジュールや体調等、全員揃って定例会に集まることができず、少々寂しい思いをしています。とはいえ気心の知れたメンバーなので、会えば近況報告など話に花が咲きます。ここ数ヶ月は、連弾

ならではの楽しさと難しさを体感しています。

今までは楽譜を中心に勉強をしてきましたが、会報誌「Afternoon Music」を活用できないかと話し合い、「MASA先生とHillockのチャット de ギロック」を取り上げることにしました。自分一人では文章をじっくり読み込めないという声があったので、定例会では声を出して読み合い、楽譜をチェックしながら実際に音出しをしています。会報誌のバックナンバーを引っ張り出してきて、連載第1回からスタートしました。始めたばかりですが新しい発見もあり、よい刺激をもらっています。(記/中橋早苗)

アンサンブルも楽しい！ 弾き合い会スタイルの定例会 【大阪支部】

定例会では、弾きあい会として、年に2回、ホールでの演奏も実施していて、ギロックとその仲間たちの曲を楽しんでいます。1月は昨年の続きで、後藤ミカさんの「ブルグミュラーでお国めぐりの連弾曲集」を研究しており、

ピアノ連弾とエレクトーンやパーカッションを使って、色々な音色やリズムを工夫しアンサンブルを楽しんでいます。コンサートでは、「すてきにはずんでカーニバル」、鍵盤ハーモニカをプラスして演奏しました。「清い流れ」は中国の黄河の流れがとても美しいです。「おしゃべり」ではプリモとセコンドが入れ替わり、リズムックで楽しくスペインそのものです。(昨年末は、「一日遅れのクリスマスコンサート」1月は、「新年お弾き初めピアノコンサート」)。

新しいメンバーを迎えて、ギロックの楽譜を見直し、演奏表現や指導法なども、取り組んでいきたいと思っています。コロナ感染が落ち着いて、ギロックフェスティバルも開催できる日も楽しみです。(記/中西起世子)

4月にギロックコンサートを開催予定！ 【長崎支部】

長崎支部では、4月に「ギロックコンサート」を企画中です。ギロックとその仲間の曲なら、誰でもどの曲でも弾いて良いというコンサート、合奏や連弾などの講師演奏もできればと話合っています。ご家庭の事情などで退会者が続いたので、コンサートでは一般公募もして、会の存在を知ってもらうことで会員を増やして、ギロックの曲に多くの方が親しんでくれたらいいなあと思っています。(記/福田)

支部の目標と課題に取り組む 【石川支部】

石川支部では自分たちに必要な今年の目標&課題を掲げています。

ひとつ目は「teaching」外部の先生をお招きしての勉強会を検討しています。(現在、今野万実先生と交渉中!) ふたつ目は「playing」ソロの

曲を、人前で弾けるよう各自取り組む。人と比較するのではなく、自分の成長のために、自ら演奏を楽しめるよう生徒さんに演奏の楽しさを伝える使命が、私たちにはあります。

コロナの影響でしばらく開催を見合わせていた、支部主催のギロックフェスティバル再開の要望もあり、詳細はまだですが、これから話し合いをしていきます。今年も賑やかに明るく活発に活動していきたいと思います。

(記/富田美智子)

皆のピアノを聴けるのが嬉しい 【札幌支部】



今のところ、対面の完全復活とまではいかないですが、メンバーと会える機会が増えてきて嬉しいです。みんなで集まって話をする、とても新鮮で気持ちも和らげられます。生のピアノ演奏を聴けるのも良いです。

今まで取り組んできた、「こどものためのアルバム」と、「野うさぎのラグタイム」が終わり、2月からは「ピアノ・ピース・コレクション①」と、グレンダの「3つのジャズ組曲」に取り組みます。ここ数年、連弾の機会がなかったので、ちょこちょこ連弾もしていきたいね♪と話しています。

(記/児玉ひろみ)

池田奈生子さんを迎えて 作品セミナー開催 【柏支部】

昨年11月7日、2年ぶりに池田奈生子さん(札幌支部)のセミナーを開催しました。



1曲ごとに、曲が出来た経緯や曲への思いを伺えるのは、作曲家ご自身が語るセミナーだからですね。曲のタイトルは、アメリカと日本との感じ方の違いなども考慮しつつ決めるのだと知り、興味深かったです。「友情Yujou」は、特に全てのギロック会員に弾いてもらいたい1曲です。

「CHRISTMAS POP FAVORITES for Piano Solo」は、奈生子さんが曲集の中で担当したアレンジの曲を、弾いてもらいましたが、ちょうどクリスマス前でタイムリーでしたので、教室クリスマスコンサート等で演奏、弾いていた方も多かったようです。毎年秋は「奈生子ワールド」を定着させ、来年もセミナーを開催したいと思います。(記/永澤昌江)

2台ピアノ、連弾作品も 楽しんでいます 【仙台支部】

定例会では「ギロックの世界」「ギロックの休日」の2冊に加えて、2台ピアノや連弾の教材も取り上げています。

昨年12月は、会員宅に会場を移し「CHRISTMAS TOGETHER」、バッハの連弾作品、「シャンパン トッカータ」などで、一年を締めくくりました。

皆が無理なく集まれて、個々の意見や工夫、アドバイスが次々と溢れ出る、そこから再発見してステップアップできるという充実した時間を、改めて認識したところです。

毎年恒例のギロックコンサートは、初めての会場で5月に開催を予定しています。(記/小野寺朋子)

特集☆モーリス・ジュールノー (フランス・1898-1999)

～自分がその音楽の中にいるような親しみを感じ、

そしてギロックのフレンチスタイルの作品を思い浮かべた～

～モーリス・ジュールノーを 初めて聴いて～ 安田裕子

モンテリオールで出会った、音楽学者の友だちが、ピアノを演奏する上で必ず役に立つから聴くようにと、私に50枚のCDを残して亡くなった。

その中で、私の心をしっかり掴んだのが「モーリス・ジュールノー」の音楽だった。どう表現していいのかわからないけど、消化ができるというか音楽がわかるというか、皆さんは誰かの音楽を聴いた時、そんな経験をしたことはありませんか？

1898年にフランス、バスク地方のピアリッツに生まれたモーリス・ジュールノーは、後期印象派に属する作曲家です。パリのエコール・ノルマル音楽院でマックス・ドローヌから作曲を学び、そして和声楽と対位法をナディア・ブーランジェから学びました。終了後は故郷へ帰り、生活のために職に就き、作曲はむしろ楽しみのためにしていました。そのため彼の作品は、1992年まで世の中には出ていませんでした。

ドイツのピアニスト、トーマス・ベッツによるジュールノーのCDの第1曲目「Valse op.2」を聴いた途端、なんておしゃれでかっこいいんだろう、まるでシャンソンを聴いているみたいで、すぐにジュールノーの音楽が大好きになりました。ベッツのピアノはまるでシャンソン歌手が歌っているようで、二人の歌手の掛け合いが出てくると、それぞれの声部が魅力的に歌われていて、ギロックが「声部を大切に歌いなさい」と教えてくれたことがよみがえりました。自分でも自分なりにこの曲



↑モーリス・ジュールノー

を歌ってみたい！と思いました。

そのほか、「Simple Cantilene」はとても質素な美しいメロディーから始まり、中間部で四度の重音（左手を合わせると7thコードになる）で作られたメロディーは、ものすごいインパクトです。ギロックの「アダージョ・エキゾチック」の後半は7thコードでメロディー奏ですすし、「バグダット」でも、四度でメロディーにハーモニーをつけて、インパクトのある響きだったと思い出しながら聴きました。自然を描写した「Midi aux champs」（午後の草原）では、叙情小曲集の「中国人の行列」を思わせる五度の音列が出てくるので、またまた釘付けになっていました。

ジュールノーについてオンラインで得られる情報量には限りがあり、楽譜もなかなか手に入らなかったため、思い切ってCDのピアニストの一人であるトーマス・ベッツにメールを書きました。もう一人のピアニストで彼の師であるジャン・ミコーは2021年に亡くられています。楽譜はシート・ミュージック・プラスで買えることが分か

りましたが、3ヶ月近く待ちました。ヘンリー・ルモワーヌ出版社からは1週間ほどで届きました。

私は楽器店へ行って、すぐ手に取ってみることに出来ない不便さを感じました。まだジュールノーの名前が知られていないことや、フランスの出版社との関係などで、日本での出版は気長に待つよりないことも知らされました。

トーマスがフランスに住むジュールノーの末娘で、彼の音楽を世の中に出したシャンタール・ヴィルレット・ジュールノーを紹介してくれました。さっそくシャンタールと連絡をとり、お父様で作曲家であるモーリス・ジュールノーについてお話を聞きました。

今回は「モーリス・ジュールノー特集」です。ジュールノーに縁のある方々のインタビューをお楽しみください。

(記/安田裕子)



～シャンタール・ヴィルレット・ ジュールノーさんにインタビュー 娘から見た父、

「モーリス・ジュールノー」～

安田裕子以下H： シャンタール、こんにちは。さっそくですが、作曲家であるお父さんは、ご家庭ではどんな方でしたか？

シャンタール・ヴィルレット・ジュールノーさん以下C： 父は、母にも子どもたちにも、そして彼が出会った人たちに対しても、物静かな人でした。

1898年生まれて、この時代に生まれ

た男性たちが教育されたように、とても控えめな人でした。とは言え、家では優しく愛情に溢れていました。そのことは毎晩彼が妻や子供たちのために書いた作品を、ピアノで演奏して聴かせてくれた事からも、よく伝わってきます。日々とても前向きで、おとなしく、礼儀正しく、そして他の人のことを思い遣いました。だから、私たちは彼のような父を持って、とても幸せでした。

H：1898年生まれなのに、なぜ、彼の作品は今まで世の中に出なかったのですか？

C：本当ですね、彼の作品は1992年に音楽家たちに見出されて演奏されるようになりました。彼の長い人生の本当に最後の時にです。とは言っても彼の作品は1923年から1974年まで公の場で演奏はされていたのですよ。それから1992年の終わりまでの間は、演奏されていませんでした。

父は音楽界に属していなかったので、演奏される機会も時々でしたね。そして音楽で身を立てることを絶対に嫌ったので、管理職に就いていました。よく作曲家が彼らの作品に没頭する女性ピアニストと結婚することがあるでしょう？でも家族には誰も音楽家はいませんでした。父は作曲をすることが好きで仕方なかったんですね、それでよかったんです。だから父の作曲の先生たちも、よくこのことを理解していました。でも、エコール・ノルマル音楽院を卒業する時、これからもぜひ作曲を続けるようにと勧められたそうです。実際、父にとって作曲は、キャリアや欲望を気にすることなく、自分一人の秘められた世界だったのだと思います。

父はこの状態が心地よく、フリーで独立した作曲家であり、人々に自分の作品について言い広めることもなく、

とても控えめな人でした。しかし、彼の作品がコンサートで演奏されると、他の人の解釈を興味深く聴き、とても喜んでいました。ピアノソロ作品は自分でもベルベットのような優しいピアノの音色で素晴らしい演奏をしたのですが、それらの作品でさえ、他の人の解釈を大いに楽しんでいました。

H：なぜ、お父さんは作品の出版をしなかったのですか？

C：はじめは父も自分の作品を出版していました。エコール・ノルマル音楽院の作曲科の生徒だった時、初めの9つの作品、今日残っていればきっと人々に愛されていたと思いますが、それらを1932年まで定期的に出版していました。しかしその後、出版社がなくなってしまう、彼の著作権が残っていた楽譜は、他の出版社の権利下になりました。この出版社も父を含む多くの作曲家の作品をなくしてしまいました。それはきっと保管場所が狭かったからか、1936年におこった悲惨な経済危機でフランスの音楽業界が苦況に陥ったからか、あるいは第二次世界大戦のためかもしれません。そのため、父はとても大きなショックを受けてしまい、二度と出版をするのは嫌だと思ってしまいました。

その後、父は、毎晩手書きの楽譜をトレーシングペーパーにチャイナインクで、根気よく書き写しました。これらの手作りの楽譜は、その後印刷して表紙をつけて製本されましたので、彼自身も音楽家たちも譜読みが楽になりました。1950年代の作曲家たちもこの方法を使っていましたが、出版されるのとは広がり方に大きな違いがありました。（もしその出版社が、ただ楽譜の売り手というだけでなく、他の活動にも非常に積極的ならばですが...）作曲家にとって出版できないことは、作品を世に広めることに、大きな痛手

を与えました。だから、1990年に父の作品を聞いた人々は「なぜこの美しい音楽がこの世にあることを今まで知らなかったのかしら？」と驚きました。

H：大変な時代で色々なことがあったのですね。ではどのようにして彼は再度出版することを承諾してくれたのですか？

C：毎晩、私は父が弾くバッハ、ベートーヴェン、ショパン、シューマン、ドビュッシー、それにフォーレを楽しんで聴いていました。とりわけラヴェルのことは素晴らしい作曲家だと何度も言っていました。でも私たちは彼の作ったピアノ作品を聴くのが一番好きでした。そしてある日気づいたのです、もし父が亡くなってしまったら、このように家族だけで楽しんでいる父の音楽は、もう聴けなくなってしまうのだと。父も、きっと前のように自分の作品をコンサートで聴きたいだろうと思いついたのです。父に、またコンサートで自分の作品を聴きたいか尋ねてみたら、彼は賛同してうなずいてくれたのです。どの作品をコンサートで聴きたいか尋ねてみました。「私のピアノ連弾のためDivertissement（エンターテイメント）と弦楽四重奏曲」と答えました。しかしその後、私は音楽関係の仕事をしてないし、誰も音楽家を知らないしどうして進めたらいいのだろうと途方に暮れました。フランスの音楽家の住所録とコンサートやセミナーのチラシを見つけて、優しくそうな温かい笑みを浮かべている写真のアーティストに、恥ずかしかったけど手紙を書いてみました。父の未出版の作品をみるなり、彼らは是非演奏させてくださいと引き受け、私の音楽ディレクターとしての旅路を助けてくれました。それから出版社を捜し、パリのコンプル出版社の女性の社長と出会うことができました。

H：ジュルノーの作品が再度出版されたのは、いつ頃でしょうか？また、印刷された楽譜をお父さんが見て、何かおっしゃったことはありますか？

C：私が父の作品を出版する手伝いを始めてから、「Simple Cantilene」が1993年に出版されました。このCantileneはメロディアスでシンプルな歌で、難しくありません。彼はオルガンのソロとオルガンとヴァイオリンのための二つのバージョンを作りました。ピュアーでフレッシュな父のサウンドは人々に喜ばれ、よく結婚式で演奏されました。彼は1999年に100歳で亡くなるまで出版された楽譜を見ることができましたよ！信頼のおけるパリのコンプル出版社から楽譜を出版できたことを大変喜んでいました。私は父と今後、彼の楽譜をどのようにしたいか話し合いました。例えば、父は自分の作品を他の人が編曲することを拒否しました。特に自分の好きな作品や、自分独自の個性的なスタイルで書かれた作品は自分で編曲をしたいと思いました。既にご存知かも知れませんが、作曲者自身による編曲は、作曲者の個性や人柄に直接リンクさせながら、また新しい芸術作品を新たに生み出すことができるからです。とても価値のあることでもあります。

父は、いつも自分の作品の演奏を、聴衆と一緒に聴くのが好きでした。アーティストや知らない聴衆と話して、彼の音楽が好きで、そして彼らのためにもなるって言われるのがとても嬉しかったようです。若い頃に住んでいたピアリッツとニースの時代も、その後パリに住んでいた時も1974年までずっと、自分の作品のコンサートを楽しましました。

1997年11月23日、日曜日の午後パリのアメリカン・チャーチであったコンサートが最後でした。その頃、父は母を亡くし、そして99歳の誕生

日を迎えたところでした。この時は、歩くのも大変でしたが、アーティストたちにもう一回会ってお礼が言いたいという思いで参加しました。アーティストたちも父の音楽と何より父のことが大好きでした。



H：ジュルノーの音楽はカラフルな調性と個性的なハーモニーだと思います。そして子どもの教育教材というよりコンサートピースかもしれませんね。何よりすごいと思うのは彼が自然の美と人間の心を音楽で表現していることです。それはどこからきているのですか？

C：アーティストたちと音楽評論家たちも、ヒロコと同じように豊かな色彩について感想を述べています。玉虫色に輝いている、雅やかな、呪文を唱える、魅力的で洗練されている、夢を持たせてくれる、そして温かいサウンドだというような感想を述べています。いろいろありますが、誰もが自分の感性に従って感情を表現していますね。しかし大切なのは、これらの色彩が全ての人々に喜びを与えるということです。父のハーモニーについては、ナディア・ブーランジェが優れた教授だったからだだと思います。そして父は何冊も和声楽の本を読んでいました。

子どもの教育教材についてですが、ヒロコは正しいと思います。父は子どもたちに影響されて音楽を書いた作曲家で、子どもにピアノを教えるためでないことを承知していました。

しかし面白いことに、彼が子どものために書いた作品が、より重要な作品と並んでクラシックコンサートで演奏されることがありました。例えば、「若者のための組曲 前奏曲」は、夜に聴かせてくれたバッハのように平和な気持ちにさせてくれました。大人になっても密かに子どもの時の心を持ち続けているのかもしれませんがね。

「美」についてですが、自然の美の表現は、彼の瞑想的な性格からくるものだと思います。大西洋やバスク地方のピレネー山脈、あるいは真っ青な地中海を目の前に眺め、それをヴァイオリンで表現しています。フランス北部の緑の草原、森、そして池の風景をピアノで表現しています。瞑想的な性格だと言っても、人とおつきあいには何の影響もなく、父は若い人にも若い人にも分け隔てなくとても親切でした。

H：シャンタールがされてきたことはとても大切で偉大なことだと思います。日本ギロック協会のメンバーもギロックの音楽を広めるためにいろいろな活動を繰り広げてきました。メンバーに一言、お言葉をいただけますか？

C：世界中にたくさんの作曲家がいるので、音楽と出会うチャンスはたくさんあると思います。ヒロコと出会ったおかげで、私はアメリカの作曲家ウィリアム・ギロックを知ることができました。彼の音楽は、平和で繊細で、そして詩的で夢を見せてくれる音楽です。人々がギロックの音楽を好きになるのはとてもよくわかります。すでに亡くなった作曲家への忠誠な働き、そして子どもや大人の生徒たちへの忍耐強い指導、そしてコンサートでの美しい演奏をされる皆さんへ心から「ご活躍おめでとう！」を贈りたいです。これらのことはとても大変な仕事です。でもそれと一緒にとても大きな喜びでもあります。皆さんの音楽才能が人々に幸せを運んでいますよ。ありがとうございます！

皆さんにとって2023年も良い音楽の年でありますように！

モーリス・ジュルノー 楽譜案内

<https://www.henry-lemoine.com/fr/compositeurs/191-journeau-maurice>



CD ジャケットの表紙 ↑ 4作品が聴けます



～トーマス・ベッツさん インタビュー～



トーマス・ベッツさん

ピアニスト。現在、ドイツ、ザールブリュッケンにある、ザール音楽大学で後進の育成にあたる。フランス人ピアニスト、ジャン・ミコー（1924-2021）の助手を務める。

安田裕子以下 H：トーマス、こんにちは。ジャン・ミコー先生と共同製作で、作曲家モーリス・ジュルノーの作品を収めたCDは、いつ頃レコーディングされたのでしょうか？

トーマス・ベッツさん以下 T：レコーディングしたのは2000年、私が34歳の時でした。そして翌年2001年に発売されました。レコーディングに至ったのは、その何年か前に、私の師ミコー先生と彼の奥さんでソプラノ歌手のクローディ・ヴェヘーグと一緒に、パリとザールブリュッケンでモーリス・ジュルノーの作品で、コンサートを何度か開催していたからです。ミコー先生と私はピアノ曲を演奏し、クロー

ディはジュルノーの歌曲作品から2曲歌ったので私が伴奏をしました。エコール・ノルマル音楽院の、コルトー会館で行ったコンサートには2回とも、作曲家であるモーリス・ジュルノーが聴きに来てくれていました。その時彼は98歳だったのですよ！私はとても感激しました。その上、彼は私たちの演奏を、大変気に入ってくれたのでとても嬉しかったです！

私たちはジュルノーの作品を、コンサートと一緒に演奏していました。曲を分担して弾いていたので、CDの録音も必然的に分担して受け持つことになりました。

H：トーマスの演奏は奥が深くて素晴らしいのですが、このような演奏をされるのには、若くしていろいろなことを経験されて来たのでしょうか？

T：正直なところ、誰でも、何歳であっても何か大きな出来事を経験していると思います。でも私にとって1997年に母を亡くしたことは大きなショックでした。それ以来、私の物の感じ方が大きく変わりました。

私の家は音楽一家ではありません。両親は楽器こそ演奏しませんでした。とても音楽が好きでした。

初めは音楽の道を進もうとは全く思っていなかったのです。高校を卒業してコミュニティサービスを経てから、音楽療法を学ぼうとしたのですが、ダメでした。だからピアノを選んだのですが、今になってみれば、この選択の方が自分に合っていたと思います。ザール音楽大学ではソリスト試験を、パリではコンサート奏者の高等ディプロマを最高点で卒業できましたから。

コミュニティサービスとは、当時、ドイツでは高校が終わると、軍隊で訓練をするか、社会へのサービスをしなければなりません。私はハンディキャップの学校で20ヶ月働きました

た。それは私にとって、とても良い経験になりました。

H：ザール音楽大学ではミコー先生について学ばれたのですか？その後、パリのエコール・ノルマル音楽院で学ばれていますが、ミコー先生が教えておられたからでしょうか？

T：私がパリに行ったのは、パリに行きたかったからに他なりません。私はパリに1年間住んでいました。その後も、コンサートやエコール・ノルマル音楽院の試験でよくパリへ行きました。そしてミコー先生のアシスタントと、奥さんのクローディの歌のマスタークラスで歌の伴奏をしていました。音大で学んでいた時、ミコー先生は私の第二の父のように親しくおつきあいさせてもらい、そして同時に良き指導者でもありました。

H：ミコー先生に学んで印象に残っていることはありますか？

T：ピアノで歌うこと、呼吸をすること。腕の重さを使った温かで豊かな音で弾くこと。ピアノを弾く時はリラックスする。長く大きなフレーズを考えること。その音楽の心（意図、精神）を見つける、などです。

H：モーリス・ジュルノーのような、今まで演奏されていなかった音楽を、弾かれる機会はたくさんあると思います。新しい曲をよりよく理解する為に、譜読みで心に留めておられることはありますか？

T：まず始めに楽譜に注目します。作曲家が何を楽譜に書いているかをしっかり読みます。そこから、作曲家が何を意味しているのか探し出します。そして音符の後ろに込められている思いを見つけます。

H：貴重なお話を聞かせていただきありがとうございます！



～キャシー・クジンさんに インタビュー



↑モリス・ジュルノーの室内楽のCDで
ピアノ担当キャシー・クジン（写真右）



↑ご主人のフランソワ・ゴイック
（Vn・写真左）

安田裕子以下H：キャシー・クジンはフランス出身、エコール・ノルマル音楽院で、ジャーメイン・ムニエルと、当時音楽院の音楽ディレクターだったピエール・ベティットについて学び、ストラスブルグとプロワのコンセルヴァトワールでピアノを教えていました。現在は、ヴァイオリニストでご主人でもある、フランソワ・ゴイックとデュオを組んで演奏活動をし、そして合唱団との演奏活動も行なっています。

キャシーは、モリス・ジュルノーの音楽とはどのようにして出会われたのですか？また、CDを作られるようになったきっかけは何でしょうか？
キャシー・クジンさん以下C：モリス・ジュルノーの娘さん、シャンタール・ヴィルレット・ジュルノーが私たちに連絡をくれたのです。私たちはデュオの音楽家としてフランスの音楽家名簿に登録されていました。そこで私たちの名前を見つけて、コンサートで

ジュルノーの音楽を演奏してもらえますか？と尋ねてきたのです。彼女はまだ出版されていない楽譜を私たちにを見せてくれました。とても素敵な音楽だったので、私たちはすぐに演奏をすることにしました。私たちはジュルノーの音楽がとても好きだったので、同じようにジュルノーが好きな音楽仲間と室内楽のCD録音をすることにしました。

私たちデュオは、ピアノとヴァイオリンのための作品、フランクのソナタ、ドビュッシー、そしてジュルノーの「ソナタop6」と「子守唄」を初めてのCDで演奏しました。CDは私たちから購入することができます。この室内楽のCDにはジュルノーのピアノソロ「ピアノソナチネ2番op10」も入れました。そうしたら、CDのレビューもとてもよく、この曲の楽譜が出版されることになったのです。私たちのCDで楽譜の出版へと導いたことはとても嬉しく光栄なことでした。

「ソナチネ2番」は、ジュルノーの若い頃の音楽特徴とスタイルが生きている作品です。1楽章にはたくさん不協和音が使われています。シャンタールは、これはカモメの鳴き声だと言います。その頃ジュルノーはフランスのバスク地方にあるピアリッツの海辺に住んでいました。2楽章はとても表情豊かで、3楽章はイキイキと速いスケルツォで終わりを飾ります。

H：生前のモリス・ジュルノーにお目にかかったことはありますか？

C：私たちは会えませんでした。会ったのはジュルノーの娘さんのシャンタールだけです。私たちはジュルノーの作品をいっぱい演奏してきたので、今は少し他のものをしようと思案を立てています。次の演奏会では、フォーレ、フランクとドビュッシーを演奏します。「ソナチネ2番」はとてもチャーミン

グですね！まるでフランス音楽の真髄、ラヴェルのように素敵な音楽です。ヴァオリンとピアノの「バスクの夜」、そしてとっても優しい「子守唄」が大好きです。

パリでのコンサートで、シャンタールのリクエストにより「Midi aux champs 午後の草原」を演奏したのも心に残っています。「糸紡ぎ」を演奏するのも好きです。



～ピアニスト 三船優子さんに 聞く～



安田先生からのオススめで、またまた素敵な作曲家と出会ってしまいました。モリス・ジュルノー、名前も音楽もまったく初めての人でした。

フランス人らしい、ちょっとエスプリの効いたところもあり、映画音楽のような聴きやすさも…かと思うと、複雑なハーモニー、進展の仕方もあり、ひとことで特徴を表すのが意外と難しい作曲家のような気がします。

実際に音を出してみると、音の少なさのわりにはすらすらっと初見で弾ける感じでもなく、全体を何度も弾いてから、アーティキュレーションを考え、うまくまとめる必要があると思いました。なかなか手強い！

日常の風景などから、主にピアノと室内楽の作品を多く残していますが、室内楽曲、特に歌うようなヴァイオリンが魅力的な印象もあります。

ピアノ曲にはしゃれた小品がたくさんあるので、コンサートのアンコールに、または曲間にふっとそよ風を吹かせるようにさりげなく弾いてみたいと今からワクワクしています。

（三船優子）

MASA先生とHillockのチャットdeギロック！第13回

ジャズのリズムのおもしろさ～「ブルー・ムード」



Hillockこと安田裕子（以下H）：マサ先生、2023年もよろしくお祈いします。さて、今回はピアノ・ピース・コレクション②に収められているギロックの「ブルー・ムード」について、私は、この曲があまり演奏されるのを聴く機会がないのですが、軽いタッチとリズムのニュアンスが要求される、とっても面白い曲だと思います。私は「ぬき足さし足」で親の目を盗んで遊びに行く、若い頃の気分になりました。今回はこの曲を通して、ジャズのリズムの持つおもしろさを、マサ先生とチャットしたいと思います。



MASAこと松田昌（以下M）：「ブルー・ムード」おもしろい曲ですね～！先生がおっしゃるように、僕も「ぬき足さし足」のイメージを持ちます。「はじめてのギロック」の「おばけの足あと」と同じような、子どもにとってはとても興味のある音の世界だと思います。この曲をどのように演奏するか？と考える時、思うのはやはりリズムについてです。

「ぬき足さし足」の後に出てくる、付点8分と16分の、「ターータ」をどう弾くかです。バロック期の音楽なら、正確に譜面の記譜を守って「ターータ」と演奏すると思うのですが、ジャズの世界での理解は、バロック期とは違うと思います。

1拍を3連符に感じるジャズの世界では、付点8分と16分で書いてあっても、4分音符と8分音符の3連符「タウタ」と弾くことが一般的な弾き方。そして、ご存知のように、8分音符が2つ書いてあっても、最初の8分音符を長くして3連符の「タウタ」。

もちろん、4分と8分が3連符になっても「タウタ」。つまり、8分で書いても、3連符で書いても、付点8分で書いても、全部「タウタ」になります。

笑。「エエ～！！(◎_◎;)そんなエエ加減でええんかい？」笑

H：「エエ加減」ということは個人個人のリズムの感覚が活かされるということですね！



M：そうそう！人間でも考えてみると「エエ加減」な人の方が、杓子定規な人より魅力的であることがあつたりしますよね？

「ブルー・ムード」のリズムでも、僕の理解では、4小節目の1拍目は、8分休符と次の8分音符で書かれていますが、3連符に感じて「タウタ」と感じ、7小節目の、付点8分休符と16分音符も3連符で理解して「タウタ」。また、2ページ目の1段目2小節目の、左右で作るリズムも、左手が「タウ」で右手が「タ」の3連符、ということになります。そして、なぜか僕は、最後から3小節目の8分音符は、イーブンの8分音符で弾きたくなります。楽譜にはスラーがついていますが、スタッカートで演奏すると、とてもおもしろいと思います。



H：このイーブンの8分音符ですが、ギロックのニューオリンズ・ジャズスタイルの中にも「ニューオリンズのたそがれ」と「アップタウン・ブルース」の最後にもあります。ギロックは、2曲とも他の部分は付点8分と16分音符で表していますが、最後

は全部8分音符で書いています。「ここはイーブンで弾いてくれ！」って伝えてくれているのでしょうかね。

マサ先生、これってジャズの終わり方の特徴なのでしょうか？



M：いえいえ！そんなことはないと思いますが・・・。



H：それと「ブルー・ムード」の最後の8分音符をスタッカートにするアイデア、ペダルこそ踏んでいましたが、タッチは軽いスタッカートにしていました！



M：ジャズのリズムは、1拍に3連符を感じて弾ませる、といっても、なんでもかんでも「ターータ、ターータ」と弾ませればいいのではないと思います。ただ3連符で弾むだけではジャズにならないのは、「そそらそらウサギのダンス～～～！」は3連符だけどジャズではないことでわかりますね？色々な要素があると思います。クラシックでは、拍の「アタマ」にアクセントがありますが、ジャズでは拍の「ウラ」にアクセントがあることが多いですね。それと一般的に、テンポが速くなるとイーブンの8分に近くなり、テンポが遅くなると、16分に近くなる傾向にあります。

また、演奏者がもつスウィング感（跳ね方）は、人によって違うし、同じ曲でもフレーズによって違ってくると思います。

H：このスウィング感の違いを生徒に教える時に痛感しました！自分の持つ感覚と違うのです！自分が正

しいと思ひ込んでいましたが、たくさんの生徒の演奏を聴いているうちに、自分だけが正しいのと違うんや！と思うようになりました。それぞれそれぞれに楽しくおもしろい。



M：一般的なジャズアクセントは拍の「ウラ」にアクセントがくるのですが、「ブルー・ムード」のように付点8分音符と16分音符で書くと、拍の頭にアクセントをつけたくる気がします。まさに、音は、生き物と言えますね！もう一つ、「ブルー・ムード」のリズムのおもしろさがあります。これは松田昌の大発見！と言っても大袈裟ですが、ギロックは本当に素晴らしいです！どこかと言うと……奇数小節に出てくる4分音符の「ぬき

足さし足」の次の偶数小節のリズムがどんどん変化することだと思います。

2小節目は2拍目のアタマから「レ、レミ、レソ」の和音で始まりますが、4小節目は半拍前に移動して1拍目のウラからスタートし、6小節目は、さらに半拍前に移動して1拍目のアタマからスタートします。まるで、「ダルマさんがころんだ」のように、少しずつ前に来ている、とてもユニークな発想であり、なんとというか、素晴らしい遊び心です！凄いな～～！

演奏しながら「独りダルマさんが転んだ！」を遊んでいるつもりになると、ピアノを弾くことがとても楽しくなります。う～ん……ギロックの計画は凄いな！ちなみに右ページの、2～3小節目のリズムもとても面白いです。

♪ wakuwaku ピアノフェスティバル 2023 開催のお知らせ♪

コロナ禍の中3回開催され、毎回ギロック作品をはじめとした楽しいピアノ曲との出会いや、コメンテーターの皆さんの楽しいトークで盛り上がってきたwakuwakuピアノフェスティバルが今年も開催されます。

前回より少しスケジュールが早くなりました。

5月課題曲がホームページ上で発表

6月エントリー開始

7月動画提出開始

7月末エントリー締め切り

8月末動画提出締め切り

10月29日 アワード

詳しくは4月にUP予定のwakuwakuピアノフェスティバルホームページをご覧ください。

お宝楽譜発見！

HELLO, Mr Gillock! Carl Czerny!

(Breitkopf & haertel 出版 1997/2/25)

20年ほど前に、協会で紹介された楽譜を購入、数冊入手して当時の生徒たちのレッスンに使ったことがある「ハロー、ミスターギロック！カール・ツェルニー！」。ギロックとツェルニーが電話で、それも英語とドイツ語で会話を楽しむ4コマ漫画？があり、お互いの作品が交互に登場するという、ユーモアのある曲集です。

掲載されているツェルニーの作品は、「100番練習曲 Op.139」、「初心者のための50の段階的な練習曲 Op.481」、「第1課程練習曲 Op.599」などから選ばれています。いわゆる「30番練習曲」、「40番練習曲」ではありません。それに対し、ギロックの作品は「サマータイムブルース」「ヨーヨートリック」「サラバンド」など、こちらも多種多様なセレクトです。曲順に、二人の作曲家の作風やコンセプトが反映されているのかどうか・・・それは私にはよくわからず、手がかりをつかもうと4コマ漫画のギロックとツェルニーの会話を眺めるのですが、ツェルニーのドイツ語がわからず（笑）でも、なんとなくですが、二人の会話にはオチがない！のは、わかる気がします（笑）それでも、スヌーピーみたいなタッチの漫画はとてもかわいらしく、この楽譜をレッスンで使うと、ツェルニーとギロックがまんべんなく学ぶことができ生徒には好評でした。日本語版がないのは大変残念です。気になる方はAmazonなど、ネットでは取り扱っているようですので、チェックしてくださいね。

ギロックだけではなくツェルニーも大好きな私は、ツェルニーとギロックの競演！と思えるこの楽譜を、今まで大切に保管していました♪久しぶりに生徒たちと弾きたい楽譜です！

(前田陽子)





<長すぎる！編集後記 vol.4>

～ちょこっとピアノ～

春、日本では進級、進学、新社会人・・・フレッシュな気持ちで頑張る人たちが増える季節です。レッスンでは、新入会が年齢の小さい方たちとは限らず、シニア世代の方たちが、緊張の面持ちで教室のドアを開けられる、そんなケースも多くなりました。その、ピアノに関わる様々な場面で、私がよく耳にするのは、「ちょこっとピアノが弾けたらいいですよね」。わりと頻繁に、他愛のない会話の中に登場しますが、念のため、これは決して嫌な空気が流れる会話ではありません。

いわゆるピアノの名曲と呼ばれるものは、世の中に数多く存在します。「エリーゼのために、」「小犬のワルツ」「革命のエチュード」・・・ピアノが弾けない人でも、「あっ！知っている！」と反応する有名な曲は、ピアノを学ぶ人の憧れです。これらの名曲を「ちょこっと弾けたなら・・・♪」えっ!?「ちょこっとエリーゼ? (まあ、エリーゼならなんとか頑張れば・・・) ちょこっと革命!!!? (革命のちょこっとって何?)」

ストリートピアノの普及で、パッと見た目にはわかりにくい「実はピアノが弾ける人」が、脚光を浴びるようになりました。私は、子どもの頃、音楽室のピアノで当時習っている曲を弾くと、クラスみんながピアノの周りに集まってきて、恥ずかしかったけれど内心とても嬉しかった(笑)、そんな思い出と重なります。

「ちょこっと弾ける」、これはおそらく誰もが知っている有名な曲を弾くことで、「いいですよね」につながるのだと思います。ピアノを弾く人から見ると、これは有名な曲を「楽しく弾ける」というレベルです。楽しく弾くということは、無意識に、あるいは自由に指は動き、試奏なら楽に楽譜を目で追える、先の音に対しておおよその見当がつくレベルだと考えます。

これって、「ちょこっと」ではなく「かなり」弾けるレベルです!!!!

「ちょこっと(かなり)(笑)」弾けるようになる、このレベルに到達している人は、みんなずっとなんとなく、楽しいばかりの練習ではなかったはず、練習に行き詰まり、涙したり苦しかったりの日々もあったはず。すぐに弾けないのもピアノならでのこと、私も新しい譜面と向き合うときはため息をつきながら、肩こりもつらく、イライラする姿は、とても生徒たちに見せられるものではありません。弾けるまでの苦しさがあっても、あきらめずにピアノを弾くとそのうち楽しくなりますよと、どの世代の生徒にも寄り添って伝えたい。

希望に満ちた春の訪れに、心が弾みます。

(編集部・前田)